

第3節 南但馬地域における埴輪文化の伝播

1. はじめに

今まで見てきたように、量的には少ないが但馬の埴輪を考える上で、貴重な資料を得ることができた。これまでに但馬地方の埴輪について述べられたものに池田正男氏の研究がある¹⁾。

池田氏は但馬出土の埴輪を集成して丹念に観察し、概観することによって、養父・観音塚古墳の位置づけを考えておられる。小論では、主に円筒埴輪を再検討することによって、南但馬地域における埴輪祭祀導入の意義を考えていきたいと思う。

2. 埴輪出土の古墳

池田古墳 和田山町にある但馬で最大・最古の前方後円墳で墳丘の全長が約141mになる²⁾。1971年に行われた調査で葺石と埴輪列が確認された。埴輪列は1段目テラスで囲繞していたようだが、2段目以上は不明である。ただし墳頂部からも出土しており、主体部を方形に囲繞していた可能性がある。出土した埴輪には円筒・壺形・形象がある。そのうち、円筒埴輪はタガが断面台形でしっかりしており、外面調整はタテハケだけのものと後からヨコハケを加えるものがある。いわゆるB種ヨコハケ³⁾ではない。色は黄褐色で黒斑を持つものを含む。円筒埴輪自体、全体を復元できるものがないが、底径から考えるとさほど大きいものではない。形象埴輪には家・蓋がある。この古墳の時期は埴輪から考えて、5世紀中～後半と思われる。

船宮古墳 朝来町に所在する但馬2番目の前方後円墳で、墳丘全長86mを数える⁴⁾。2回にのぼる周濠の調査により、埴輪資料が増加した。墳丘の調査はまだされていないが、周濠の墳丘とは反対側（外側）の斜面に貼り石が施されていることがわかっている⁵⁾。埴輪は円筒が多いが、蓋・盾も含まれている。円筒埴輪はタガの断面が台形のものが多く、M字形も含まれる。外面調整はタテハケだけのものと、タテハケ後B種ヨコハケのものがある。量的には後者が多い。黒斑は見当らない。埴輪からみた時期は5世紀後半～末であろう。

森向山1号墳 山東町に所在する古墳で、以前から表採として埴輪が採集されていたが、近年開発に伴って調査が行われた⁶⁾。直径16mの円墳で、主体部は削平されていたが、周濠から埴輪が多く出土した。円筒埴輪はタガの断面が低いM字形であり突出しない。外面の二次調整はB種・C種ヨコハケを用いる。黒斑を持たない。時期は5世紀末～6世紀初めであろう。

岡田古墳群 和田山町に所在する。約60mの前方後円墳である小丸山古墳、同じく長塚古墳を中心にして、数基の古墳が築かれている⁷⁾。埴輪は今回調査した岡田2号墳以外、採集資料だけで量的には少なく全体がわかるものはほとんどない。そのうち、長塚古墳から出土した円筒埴輪は、タガが断面台形でしっかりしているものの、外面調整では二次調整が既に省略されていて、形骸化をたどっている。黒斑はなく、須恵質を呈する。青塚古墳（東墓）の円筒埴輪はタ



挿図31 南但馬地域における埴輪出土古墳位置図 (1/25,000) 「但馬竹田」「出石」

が低く、外面調整は二次的にヨコハケが残る。黒斑の有無は小破片のためわからない。これらの古墳は概して6世紀に入ってからのものであろう。

加都車塚古墳 和田山町に所在する。直径20mの円墳で主体部は横穴式石室であると思われる。樹立された状態は不明だが、円筒埴輪が採集されている⁸⁾。それによると、タガは断面が台形で突出度は小さく、外面の二次調整はヨコハケのものと省略されているものがある。黒斑はない。6世紀前半以降と思われる。

養父・観音塚古墳 養父町に所在する。27×23mの楕円形の円墳で主体部は竪穴系横口式石室である。墳丘掘部に円筒埴輪が立てられていた⁹⁾。出土した埴輪は円筒だけである。復元によると底径が25～30cmのものが多く、この時期の他古墳の埴輪と比してもかなり大きい。しかし、つくりは粗雑感を否めない。タガは断面が台形のものと三角形のものがあるが、共にそれほど突出しない。外面調整はタテハケだけで終えるものと、その後B種ヨコハケを施すものがあり、量的には前者の方が多い。黒斑は有しないが、須恵質と言えるほど焼成は良くない。全体がわかるものがないので確実に言えないが、おそらくタガが3本ないし4本、4段ないし5段構成と思われる。築造時期は出土した須恵器より6世紀前半で、6世紀後半に追葬が行われている。

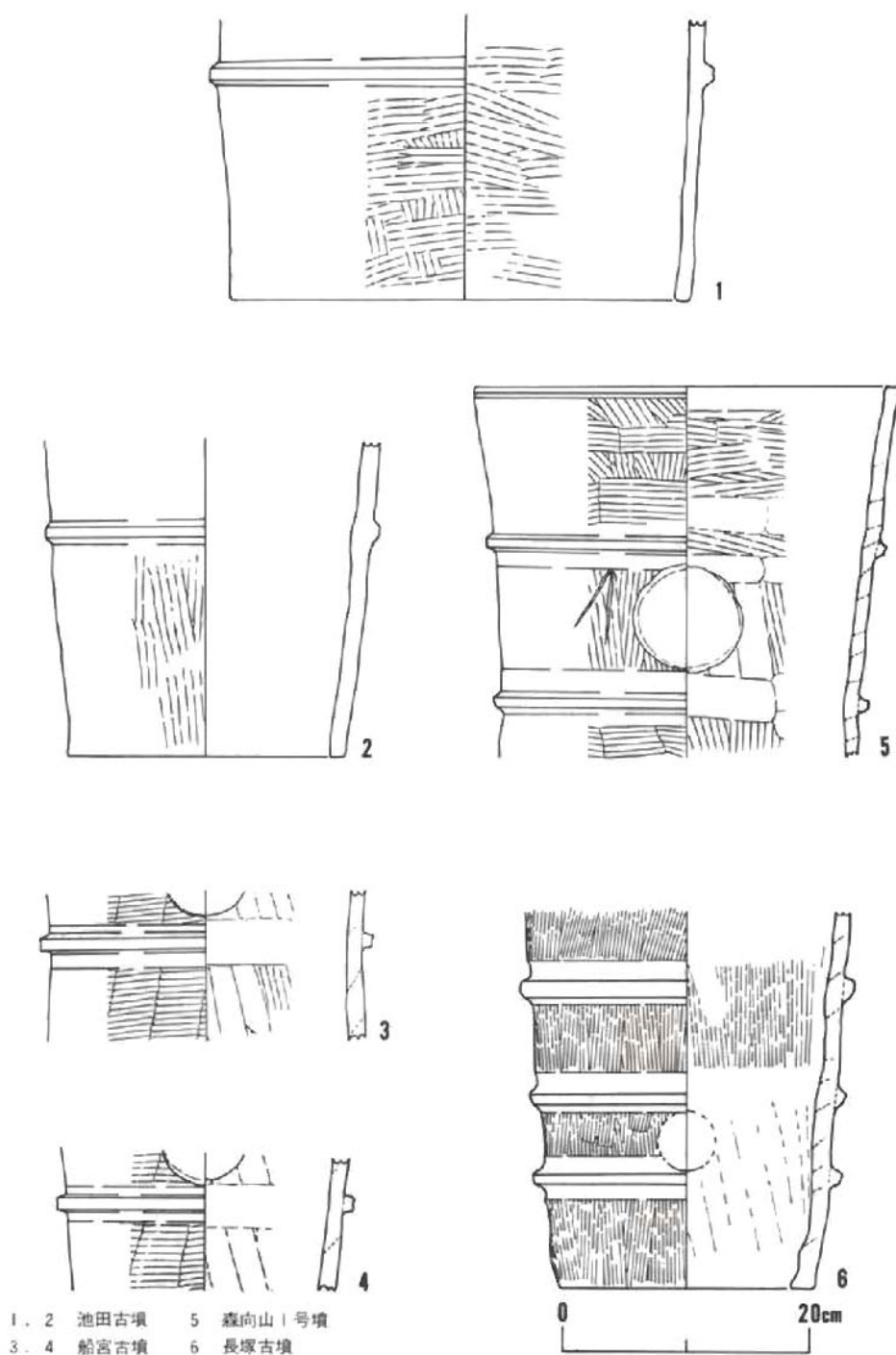
3、南但馬地域における埴輪文化の伝播

前述のように南但馬地域で埴輪文化が導入され、展開していく過程にいくつかの段階があることが読みとれる。このことを畿内政権と南但馬地域の首長との関係に結びつけて考えてみたい。

埴輪については外面調整・タガの形状・焼成に注目したい。内面調整はその施行の違いが時期差を表出しているとは思えないので触れないことにした。

0期 副葬された遺物に畿内的な要素を持つもの（鏡・石製模造品）が見られるが、墳形や主体部の構造にはまだ在地色が強く残存する時期。和田山町城の山古墳¹⁰⁾・山東町馬場19号墳¹¹⁾が挙げられる。墳形は円墳であり（城の山古墳は36×30m、馬場19号墳は約15m）、主体部も木棺である。まだ埴輪は導入されていない。遺物としては城の山古墳から三角縁神獣鏡を含む鏡6面、石製合子・石釧・琴柱形石製品が出土している。また、馬場19号墳の第一主体部から方格規距鏡が出土している。この種の鏡の出土は畿内勢力との結びつきの強さを示すものであろう。話が横道にそれるが、南但馬地方ではまだ埴輪が見られないものの、北但馬地域では既に埴輪が導入されていた可能性がある。城崎町小見塚古墳がそれである¹²⁾。円墳で粘土槨を持ち、埴輪が見られ、鏡が出土している。時期的には城の山古墳などよりも若干若いかもしれない。しかし、もし但馬地域全体を考えるにあたっては0期と次のI期の間にもう一段階考える必要があるかもしれない。だいたいの時期は4世紀後半～5世紀中頃である。

I期 遺物に加えて、墳形・主体部の構造にも畿内色が入り、在地色が払拭される時期。す



挿図32 南但馬地域の埴輪(1)

なわち、前方後円墳の出現、粘土槨・竪穴式石室の採用、埴輪文化の伝播である。しかし、主体部はまだ木棺も少なくない。前述した池田古墳・船宮古墳が挙げられる。ともに周濠を合わせると100mを超える前方後円墳であり、主体部は不明だが(池田古墳は長持形石棺であった可能性がある)埴輪を樹立していたことは確実である。前方後円墳と埴輪の出現は南但馬地域がはっきりと畿内政権の勢力下に入ったことを示すものであろう。近藤義郎氏は前方後円墳出現の意義を、諸首長が共通の墳墓形態、墳墓祭祀を持つことで広汎な結合が生まれ、同時に較差をもって普遍化するものと捉えている¹³⁾。大きさは違えども同一の首長霊継承儀礼を持つことによって、畿内政権の一員としてその傘下に入ったといえよう。埴輪の製作からみると、外面のタテハケを施した後の二次調整として、A種ヨコハケ・B種ヨコハケの一般化がみられる。特に船宮古墳ではほぼB種ヨコハケだけで定型化している。タガは断面が台形もしくはM字形で突出度は高い。また、有黒斑と無黒斑があり、このI期の中で焼成方法が転換されていったのであろう。川西宏幸氏の編年でIII～IV期にあたり、5世紀中頃～末頃と思われる。

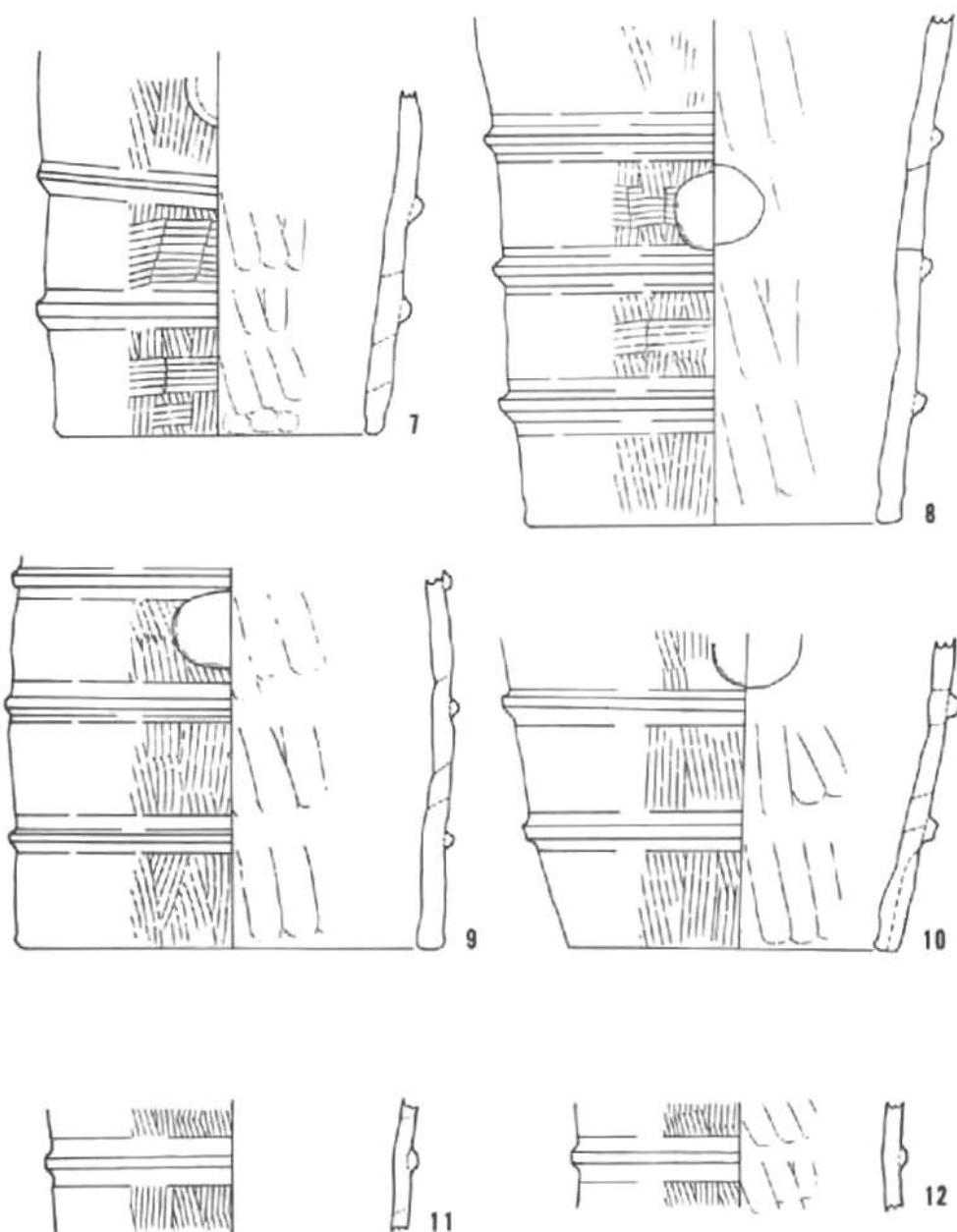
II期 10～20mの規模の小さい古墳にも埴輪が導入される時期。前方後円墳はまだ築造される。古墳の数が増加してくるが、主体部は依然として木棺が多い。前述した森向山1号墳、岡田古墳群が挙げられる。ただし、岡田古墳群の一部はもう少し時代が新しくなる。埴輪の特徴について見るとほとんどI期と変わらない。ただ黒斑を持つ埴輪は全くなく、窖窯で焼成されたものといえよう。また、外面の二次調整としてのヨコハケが省略される兆しも見える。このII期の時期は5世紀末～6世紀初頭以降と考えられる。

III期 主体部に横穴式石室が導入され、なおかつ埴輪と共存している時期。南但馬地域では前方後円墳は消滅し、小規模の古墳の数が増してくる。前述の加都車塚古墳、観音塚古墳が挙げられる。埴輪を見てみると、I期・II期とさほど差異があるのではない。ただ、焼成は全て窖窯でタガのつくりや外面の調整には粗雑な感を受ける。III期の時期を考えてみたいが、加都車塚古墳の年代は横穴式石室の可能性と埴輪の存在から、少なくとも6世紀前半に収まるもので、それ以降に下らないと考えたい。また、観音塚古墳の年代は須恵器から6世紀前半に築造され、6世紀後半に追葬が行われたとある。埴輪の樹立状況から築造時に立てられたと理解してよい。これらのことから、III期の時期は6世紀前半から中頃には収まるものと思われる。こうして考えると、II期とIII期は一部併行していたとも思え、II期として含めている古墳の中にはIII期であるものが含まれている可能性もある。

IV期 墳形は円墳、主体部は横穴式石室で埴輪は消滅した時期。古墳の数も群集墳というふうに爆発的に増加する。具体例は挙げないが、6世紀後半以降である。

4. まとめ

今まで見てきたように、畿内から導入された埴輪文化が南但馬地域の古墳の中へ浸透していく過程を明らかにできた。ただし、ここで挙げた例は南但馬地域の古墳の数からすればほんの



7. 8. 9. 10 妻父観音塚古墳
11. 12 加都牟塚古墳

挿図32 南但馬地域の墳輪(2)

一部にすぎない。もちろん、後期の群集墳が全体のかなりの数を占めるものの、埴輪を持つ古墳は少ないと言えよう。このことから、この地域においては埴輪祭祀自体が普遍的なものとなりえなかったと考えられる。しかし、今まで述べてきたように埴輪導入の流れをスムーズに把握することができる。

古墳時代の但馬全体を考えると、南但馬地域は非常に重要な位置を占められると思われる。北但馬に埴輪祭祀の採用という点では遅れをとるが、最古・最大の前方後円墳が南但馬地域に築かれたことはまず南但馬地域から順に畿内政権の傘下に入っていたことを表すのであろう。埴輪の動向について簡述するつもりであったのだが、全く違った方向へいってしまったようである。今後、南但馬地域だけでなく、但馬全体で埴輪の出土例が増えることを期待したい。

註

- 1) 池田正男・渡辺昇『養父・観音塚古墳』1980年 養父町教育委員会
- 2) 櫃本誠一・山本三郎『城の山・池田古墳』1972年 和田山町教育委員会
- 3) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号 1978年
- 4) 但馬考古学研究会『よみがえる古代の但馬』1981年
- 5) 朝来郡広域行政事務組合 田畑 基氏 1987・88年 調査
- 6) 田畑 基「森向山遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』1988年 兵庫県教育委員会
- 7) 武庫川女子大学考古学研究会『岡田古墳群測量報告』1974年
- 8) 櫃本誠一・瀬戸谷皓『日本の古代遺跡 兵庫北部』1982年 保育社
- 9) 1)と同じ
- 10) 2)と同じ
- 11) 山東町教育委員会『五反田・馬場遺跡群 現地説明会資料』1988年
- 12) 4)及び8)と同じ
- 13) 近藤義郎「前方後円墳の誕生」『岩波講座 日本考古学6』1986年 岩波書店

尚、船宮古墳、森向山1号墳、加都車塚古墳の未公開資料の公表について、朝来郡広域行政事務組合 田畑 基氏より快諾を得ました。記して感謝します。